バスケットボール指導者の考える理想の指導に関する質的研究

A Qualitative Study on the Ideal Coaching Thought by Basketball Coaches

コーチング科学研究領域
5007A007-2　伊平遼一　　研究指導員：堀野博幸　准教授

Ⅰ．緒言

スポーツにおいてはコーチングが重要であるにも関わらず、バスケットボールのコーチングに関する研究が日本ではほとんどなされていない。トップレベルのバスケットボール指導者について研究することで、日本バスケットボールの新たな可能性が見出せると考えた。社会学で用いられてきた質的研究をスポーツ心理学の分野に応用した Cote et al. (1993)の研究方法が指導者を研究する手段として有効であり、本研究の研究方法とした。

本研究の目的は、高い競技力の高等学校バスケットボールチームの指導者が現在大切にしている指導、理想と考える指導、そしてその理想が達成されない要因について明らかにし、そこから日本の育成年代バスケットボール指導の問題点と方向性の手掛かりを導き出すことである。

Ⅱ．方法

対象者は、競技成績の優秀な高等学校バスケットボールチームの指導者４名である。1 対 1 の半構造的、深層的、自由回答的インタビューによって得られたデータを質的分析法によって分析した。[現在の指導で大切にしていること（以下、現在の指導)]、［指導者が理想とする指導（以下、理想の指導)]、[その理想の指導が実現できない要因（以下、乖離を生む要因)］の 3 つの分析テーマを設定し、それを基に以下の手順を踏んだ。

1) インタビューデータの文字起こし
2) インタビューデータから分析テーマに合った部分を抜き出す意味単位の抽出
3) 類似した意味単位同士を括るカテゴリーの作成
4) 得られたカテゴリーの関係性を表す概念図の作成

本研究は、以下の三点によって信頼性を確保した。第一に、インタビューの方法を半構造的にすることで、対象者への質問の均一化を図った。第二に、インタビュー前後に練習現場の観察を行い、その内容をメモに取った。その情報をデータ分析時に活用することで、より精細な分析が可能となった。第三に、筆者によって抽出された意味単位・カテゴリー群の妥当性を確保するために、意味単位の抽出の段階から質的研究に精通する研究協力者 3 名によって分析内容が検証された。

Ⅲ. 結果

１．現在の指導

《選手・チームの意識》と、《指導者の意識》、そしてそれらの支えとなる《育成環境》の 3 つがカテゴリーとして括られた（図１）。

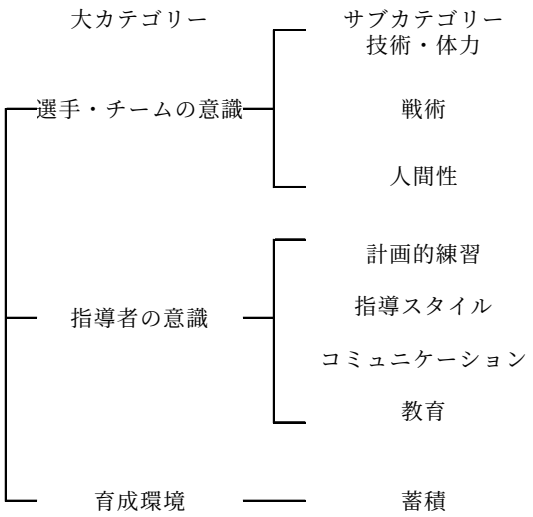

図１．現在の指導の階層的カテゴリー 一覧

２．理想の指導

《選手に求めること》と、《指導者が自身に求めること》の 2 つのカテゴリーに分類された（図 2)。

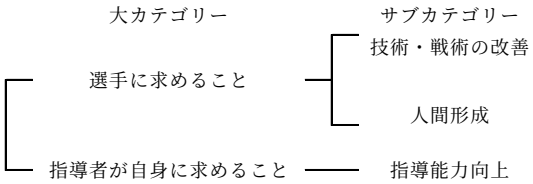

図２．理想の指導の階層的カテゴリー 一覧

３．乖離を生む要因

指導者では解消できない《不可避な事象》がカテゴリーとして整理された（図３)。

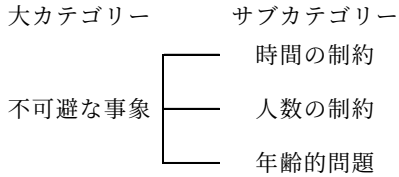

図３．乖離を生む要因の階層的カテゴリー 一覧

４．カテゴリーについての概念図

これらの結果からカテゴリー同士の関係性を以下の概念図で示した（図４)。

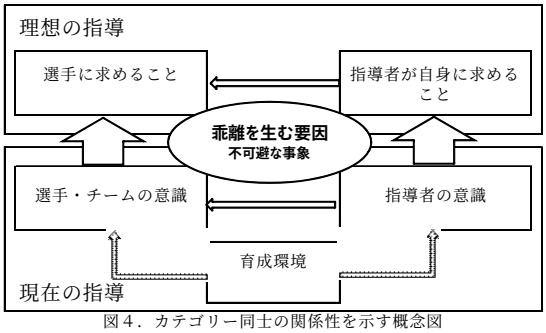

図４．カテゴリー同士の関係性を示す概念図

Ⅳ．考察

日本の高等学校の競技成績が優秀なバスケットボールチームの指導者は、国内の競技を重視している為、現在の指導と理想の指導の乖離は小さいということが考察された。更なる競技力向上を図るには世界を視野に入れて指導を行う必要があると示唆された。

育成年代トップレベルのバスケットボール指導者は、指導において人間形成を重視していることが示された。北村ら(2005)の研究でも同様の結果が得られている。

対象となった指導者は、自身の指導力向上に他の指導者との関わりが影響を与えてきたことを述べている。このことから、バスケットボールの指導改善には、他の指導者の存在が重要であると示唆された。

サッカー指導者を対象とした先行研究の結果と比較すると、種目が異なる場合であっても、育成年代の捉え方や、スポーツにおける環境の重要性は同様な意味合いを持つことが示唆された

Ⅴ．今後の課題

トップレベルの指導者が保持している個性と独自の指導スタイルに着目し、焦点を絞った研究を行う事で、指導力向上の別の手掛かりが掴めると考えられる。